

逝
之
春



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60

始



特106
514



春

青柳紅潮著



故川俣青冬氏遺詠

紙捻のむすべる家を尋ね尋ね

青葉の山に駒うたせけり

自序

南國の春が、強いストームに吹きまくられて、北の國へ行くやうに、私の少年時代も、今正に過ぎやうとしておます、もう私は青年にならなければなりません、私はそれがなんだか悲しいのです、夕暮の窓によつて、じつと思いに洗んでおますと、どこからともなく「汝は十八だ」と言ふ聲がします、あゝ私はもう青年です。

夢にさんが言はれたやうに、街路を歩む時、ふと自分の姿が、シヨウウィンドに寫つたなら、悲しくなります、紅潮した頬はありません、黒い瞳もありません艶々した髪もありません、少年らしい處は、みじんもありません、あゝ、そうして、振り長い派手な着物も着られません。

年が過ぎてゆくのにつれて、嬉しい、愉快な生活は營まれません。物は皆、悲哀であります、涙でありさす、且つて少年時代に、物を見、聞いて、悲哀を感じましたでせうか

い、は、夫れは悲しいストーリーによつてのみ得らるゝものでしたに過ぎません涙があつたでせうか、はい、は、夫は、已にまかせられぬ時起る涙でありました、もう私は、世界の事物が悲哀であります。

私には、世界の事物が涙であります。

私はいつまでも少年の幻影を追うて、美しい追憶にふけり度いのです、ゆりかごの中に、安らかに何の不安もなく、何んの心配もなく、すやくと寝ておた時の事を思い出して、そんな風にしてゐるやうに思い出したいのです。若い美しい女に抱かれてかたしいストーリーを、き、入つた事を思い出しては、それの、單純な悲しみを味いたいです、そうして、自然に落ちる涙を、出してみたいのです。
あ、私の十七と云ふ年はゆきます。

私は私の十八と云ふ年のゆくのを、悲しみまして、私の兩の眼から落ちる涙を止める爲に此の本を私の少年時代の遺物としたい、私の十六と、十七の時に作つた作物を集めて逝く春となげきました。

少年時代の、初々しい單純な戀、單純な思想は、皆此の本の中に納めてあります、お笑なつちやいけません。

小さな本ですけれど、私には大なる事業でした、事業と云もの、最初のものでした元服した少年が美しい鐵の衣をつけて出た、初陣です、初陣です、勇ましい姿だと見て下さ

50

初陣のものの勝判を祈つて下さい。

此の小さな本、見る事の出来ない程、薄つべらな本ですけれども、私の十六十七の兩年に於る、小ちな少年の努力が見出さる、事が出来れば、私の喜びは此の上もないのです

私はもう、三絃の町と別れねばなりません、思い出の多い三絃の町と——そうして、山の手の淋しい家に住って、三味の遠鳴りに、涙する兒となりました。
私は歌や書を下さった方々に厚く御禮を申し上げます

山の手の家にて七夕の宵

紅潮しるす

目

撥袂紗
赤い帯の女
契
秋が来た
石工の死
病の後
漂浪の旅に出ずる前夜
漂浪の旅に出ずる日
京町の燕へ
五圓紙幣
若い妊人
鬼船長

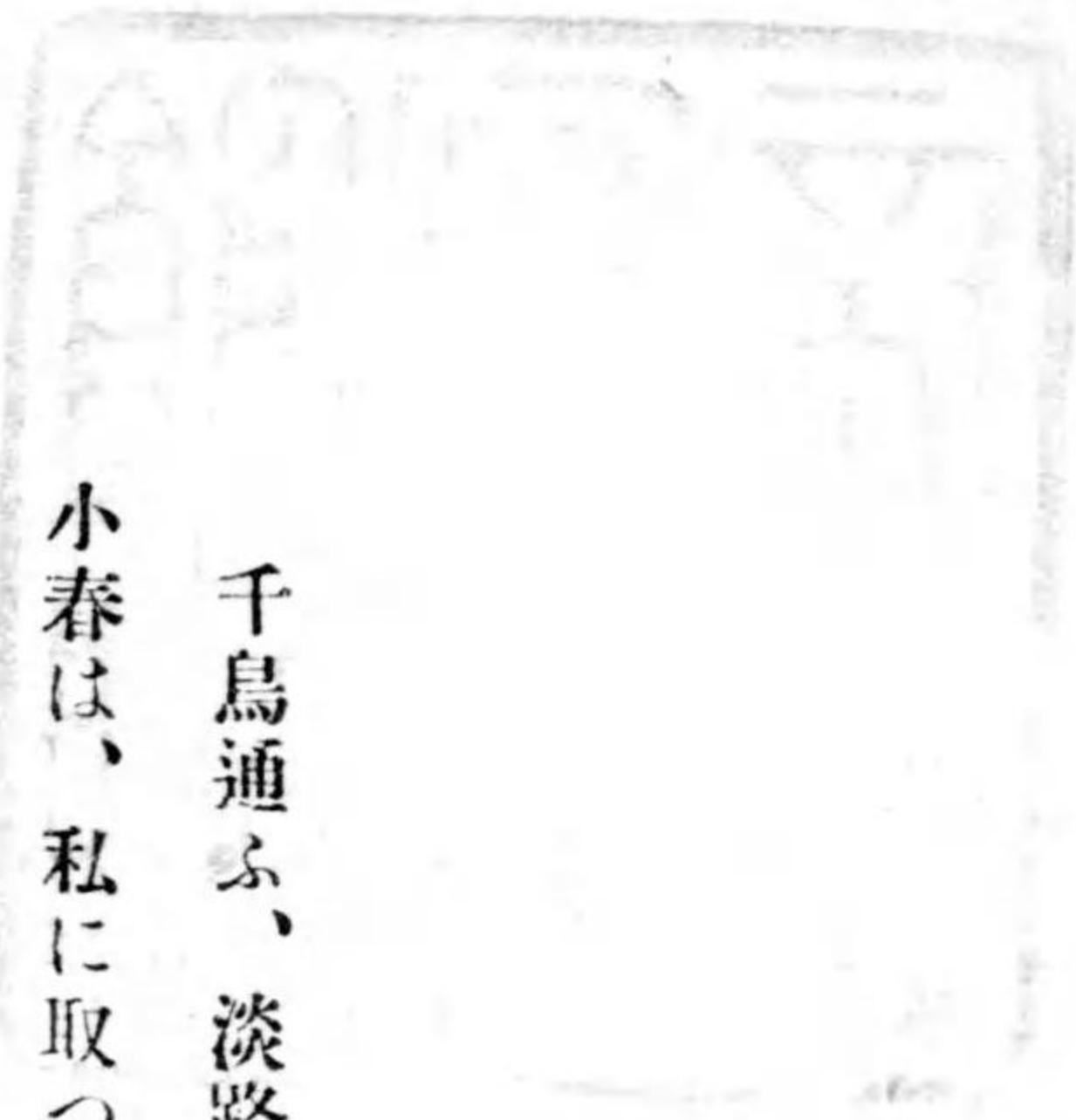
まぼろし
都の姉へ
平氣
猪
南國
春雨
こほろぎ
寂しき家より
不安と恐怖
ピヤホルルの女
水の都より
神戸にて

次

撥

袂

紗



千鳥通ふ、淡路が島からはるばると、鹿兒島の地まで流れて来た
小春は、私に取つては、忘れる事の出来ない人です。

生れは博多だと言つてゐましたが、少しもそれらしい風はなく、
やはり他の女のやうに、なまめかしい上方言葉を使つてゐました。
まだ年若い人で、小さな折りから両親に別れて、大阪の或る店へ來
て、そうして淡路で永い間暮したそうです。

私はいつもの此の女から、面白い話や、悲しい物語をききました。私はいつも小春に抱かれて、幼い夢をまごろむ前に、きつと話の一つをききました。

敦盛の最後の話もききました。私は京都のなやかな武士が、關東武者の太刀の下に坐つて、西の方を望んで、兩手を合はして拜んだ時、敦盛の心を察してなかずにゐられませんでした。

「悲しいの。悲しいの。それはもう遠い昔の話ですわ」

と、小春は云ひましたが、どうしてこれがなかずにゐられませう。「もろい質だわ」。

と、彼女がつぶやくのもききました。

「なかなかつても好いふ。須摩寺にちやんと、祭つてあるのですか

ら」

「須摩寺？」

「は、須摩寺。坊ちやんは、あそこは別荘がありましたつてね」

「は、あつたよ」

こう話してゐる内に、もう私の涙はかわいてしまつて、少年の深い睡に入るゐりました。

かくて目を醒ました時には、もう日が當つてゐました。小春はもういませんでしたが、姉さんは、起きて縫物をしてゐられました。

「姉さん」

「あゝ、もう起きたの」。

斯う話をしてゐると、廊下になまめかゝい足音がして、障子の

影から、小春が覗きました。

「もう御目醒め。さア早く顔を洗つて、御飯を喫べましや」

私は小春につれられて顔を洗いました。

そうして、いつもの様に、躍りの師匠の處へ行きました。其舞の師匠と云ふのは、もう大分の年寄で、それはく面白く事を言ふ人でした。

「小春さん。此度何を出す氣なの」

「妾ですか。道城寺」。

「それで好いかしらん」。

「わ。妾、道城寺がすきだわ」。

「じゃ、それにして下さい」

もう温習會が近づいたのです。こうなると、舞の師匠の内はにぎやかにあります。晴れの舞臺へ出やうと言つて、遊び歩るいて稽古をせない者まで、出て来るやうになります。

小春は道城寺の形をしました。そうして内へ歸りますと、自分の部屋へ私を伴れて来て、色々な本を讀んできかせます。私はなせか小春の膝に枕をして、面白く調子をつけて讀むのがすきでした。

「今日は、何にしませうかね」
と、私は見ました。

「面白いの。悲しいの」
と、尋ねましたが、まだ文字を解せない私は、ごんな本が好いかしりませなんだ。

「何んでも」

「じゃ、照葉狂言を読ませう」

と、小春は読み出しました。

……………二坪に足らぬ市中の日蔭の庭に、よくも憚う生い立ちしな一本の青楓……………と、

私はじつと耳をすましました。本の中には、阿銀小銀の、悲しいストーリーがありました。

「あア、阿銀小銀」

と、私は思はず聲を立てました。そうして、私は悲しまれずにはゐられませんんだ。

且つて或る夜に、やはり小春から、阿銀小銀の話をきいて、悲し

さのあまりなきましましたが、その時の事がまだ好く、はつきりと頭に印せられてゐました。

「もう讀まない」

で、私は手を振りました。

「ホホ……………もう讀まないの。何が悲しくつて」
と、私の顔をのぞき込みました。

「阿銀小銀」。

「まだ、あの話をおぼわゐて。まアさかしい兒ね」
と、私は抱き上げて、堅く抱きしめました。

「まア、いじらしい」。

と、頬摺して呉れました。

私は好く此の部屋で遊んで、ゐました。其頃は私は、そんなに姉と云ふ者に重きを於いてゐませんでしたけれど、小春は、もうほんとうの姉のやうに思うてゐました。

御飯を食べるにも同じ膳で、同じ碗、同じ箸、そうして、小春がお座敷へ出たら、どんなにか私には淋しかったでしやう。寢やとても淋しくて寢られず、起きてゐても、話をして呉れる人はなし、こんなときはいつでも、小春の鏡臺の前に座つて、種々の本を、ひつくり返して見るのです。又、一番下の抽出の中に秘してある、寫眞もみみます。それは、小春程の、若い女のや、若い男のもでした。彼の女は、これを私がみても、なんとも申しませんが、他の者がみやうものなら、ほんとに怒つてしまつてなりません。

いつでしたつけ、妹分の小芳が見やうとした時ですら怒つたんですもの。

私はこうして、毎日のやうに、なんの心配もなく、無事に暮してゐましたが、恰度、温習會が終つた翌日、小春はいつになく、そわ／＼してゐました。そうして、翌る日、眼をさました時は、もう小春の姿は見いませんでした。

あ、昨夜、私を芝居見に連れて行つたのは、もう名残だつたんです。彼の女は、私起きてゐたら、むつがるだろうと思つて、夜の引き明けに船に乗つたそうです。其事はあとで姉にきゝました。

其時、私の枕の下に入れてあつたのは、美しい縮緬の撥袂紗と、一通の手紙でした、私はたれにも見つけられぬ様に、玩具入れの抽

出の底に藏めておきました。

それから、小春の事は何かにつけて、思ひ出しましたけれども撥袂紗と、手紙の事は忘れてゐました。

夫れは恰度、私が尋常二年生の時だつたと思ひますが、家の大掃除をした時、私は玩具の抽出を出して、何心なく内を見ますと、あの枕の下から出た、美しい袂紗と、手紙がでてきました。

手紙には淡路へ歸ると書いてありました。

私は今其事を思い出して、一人でほゝをみました。

赤い帯の女

汽車は私の躍り狂う小さな心をのせて、西へ西へと走りました、私は物珍らしく窓外を眺めて、広い広い關西の平野に、心を放って私の小さな胸を、出来る丈けひろげた時に、言葉に言ひ表わす事の出来ないやうな、快心さを感じました。

朝の汽車は乗客は少なくて、私と母と、それに美しい女とでした。ポニーは用事もないので、つくねんと隅ツこに腰かけてゐました。

窓外の景色に見明きた私は、母の膝にもたれて、私達の前に座してゐる、若い女を、且つて見た事のある人だと思つて、しげく見えてゐました。けれども、思い出すことは出来ませんでした。

汽車が梅田の驛に着いた時に、私にその女は、林檎を買つて呉れました。そうして、小さなナイフを出して、サラ／＼とむいてくれました。

(學校はどこ?)

と、女は尋ねました。

(幼稚園)と、私は、はずかしそうに、これだけ答へました。女は只點つては、笑んでゐました。

須磨の停車場へ私達は降りました。彼の女も降りました。私達は

あの女と別れて、別荘に入りました。

私は夕方になると一人で海邊へ出て、淡路の島の赤い灯を見ながら、瀬戸内海のやわらかい、海の音に和して、唱歌を歌うのが常でした。

今日も私は海邊へ出てゐますと、

「あなた」と私の肩に手を懸けた人がゐました、振り返つて見た時に、あの日汽車の中に居た、若い女でした。女はにこ／＼笑つてゐました。

「あつちへ行きますせう」と、女は手を取つて歩き出しました。

「何處の家へ居るの」。

「あの一番端の家」。

「あそこ」

と、女は指さしました、私はうなづきました。

「お母さんと、二人？」

「は」

「そう、淋しいでやう」

と、女は笑つてゐました。

かくて私達は毎日夕方には、きつと合ふ様に約束して別れました。私は歸つてから、あの女の事を考へましたが、單調な頭には駄目なことでした。

私達は毎日夕方は散歩しました。

女はいつも赤い帯をしてゐました。その赤い帯は、なんとなくなつかしい氣がしました。

私は赤い帯の女に手を引かれて、松の間を散歩しつつ唱歌を歌いました。そうして一時間の後には、二人は別れるのでした。

一日の後に、悲しむべき日が來ました。

私はいつものやうに、湯上りを、新しい浴衣に身を包んど、椽に

出て赤い帯の女の来るのを、口笛を吹きながら待つてゐますと、

「綾さん。綾さん」

と、赤い帯の女の聲がしましたので、忍ぶ様に裏門を出ますと、女はいつもの様に、赤い帯を締めて待つてゐました。

「今晚は」

「今晚は、僕待つてゐましたよ」

「御免ね」と、につこりして、「さあ行きませう」と私の手を取つて歩るき出しました。

初秋の夕日は赫々と、西の空に夕映ゑて、瀬戸の海を彩り、青い空の鱗雲は、南洋の青年の血潮を思い出さしめる様な、眞赤な色をしてゐました。

二人は海邊の砂に腰を下しました。つい近くの渚には、小波がやわらかな音を立て、寄せては返し、返しては寄せてゐました。

なんだか悲しい様な氣がしました。——あゝ波の音。

「姉さん何か歌いませう」

と、沈み勝な女に言ひますと、

「何を？」と淋しい笑をもらしました。

「いつものあれ」

「あゝ敦盛と忠度の歌」

「あゝ」。

女はいつもの様に歌い出しました。

——一の谷の軍やぶれ

討たれし平家の公達あはれ

曉さむき須摩の嵐に

聞えしか是か青葉の笛

——更くる夜半に門をたゞき

わが師に託せし言の葉あわれ

今ほの際まで持ちし籠に

残れるは花や今宵の歌

私は此の歌にきゝほれてゐました。喉から出るのかと思われるやうな美しい聲は、須摩の別荘に毎年が程来て、平家の人達について、色々な事をきいた私には、實に悲しい聲でした。他の歌は免に角も、此の歌は女の美しい聲で歌うのが、相應しいと思ひました。

「さア歸りませう」と、女は立ちました。私は又手を引かれて歩るき

出しました。

「ね、綾ちゃん。もうお別れよ」。

「別れ」。

「別れるの、又の夏に合ひませうね」

と、女は言ひました、私は子供心にも、別れる事の切なに涙を落しました。

「泣いちやいや。京に歸つたら、會うこともあらうのに」

私はいつまでも、いつまでもこうして二人居たい様な氣がしました。けれども時は二人を歸しました。裏門の處へ來た時、女は私を強く抱きしめて、

「綾さん。さようなら。健全にね」。

と云つて暗の中へ消えてゆきました。私はじつと、涙の出る瞳を見張つて暗の中を見つめてゐました。そうして悲しい涙を拭きながら家の中へ歸りました。

翌る日から味氣ない日を送りました。女が歸つてから三日目に私達も歸りました。

京はもう秋でした。

私は再び赤い帯の女には會うことは出來ないでしやうか。彼女の女は絹子と云つて、拾八でした。

私達少年の期待してゐた、楽しい夏の休が來ました。

私は先生から、明日から休みになりますと云われた時に、小さな胸はいやに高なりました。それに私は優等の成績でしたもの。

休みになつた翌日、私は姉と一件に、朝のまだ早い頃を、此度新しく買入れた船に乗つて、廣い青い海へ出ました。

私達は有村へ行くのでした。

赤い毛氈の敷きつめられた舟の中に、二人の小さい人は、物珍らしそうに四方を見廻しました。

太陽はもう昇つてゐましたが、海の上のこととて、さしての熱さも感せられず、オゾンを含んだ風が二人の頬を軽くなでました。白い雲は青い空に、銀の綿のやうに輝き、青い海は、須摩で別れた、

淡路の乳人の様に思われて、なつかしくてなりません。

櫓はかすかにききつて、私達は夢心地にそれを聞きました。恰度も揺籠の中に睡る小兒のやうに――。

洲の様な島が見えました。神瀬と云ふ島だと、船頭は教わて呉れました。

鹿兒島へ来る時、只一度だけ通つた海、それも夜中でしたが、好く此の海を見て、そうして航海するのは此度が初めです。

船は面白い岩が、疊々と重り合つた岸に沿うて行きました。海の底は見へすいて、魚の泳いでゐるのがみえました。

「深いでしやうか」
と、姉がききますと

「は、大變深う御座ります」
と、船頭は答へました。

高い高い岩の上に、小さな松が生ゐてゐる所もありました。仁王様が立つてゐるやうな、高い岩もありました。

「あれが観音様」

と、教わられた時に、白い小さな観音様が、岩の穴の中へ座つて、おいでになりました。二人は手を合はせて拜しました。

船頭は漕ぎ方を緩めて、次のやうな物語をしました。昔は今観音様がおいでになるあそこまで、潮が満ちて來たそうで、其頃は御燈明も、お花も上げられたそうですけれど、どうしたものか此頃は、少しも水があそこまで來ません。そうして、此處は潮の流れが大變

早い所で、多くの船が度々なやまれますから、観音様が祭つてあるのです、——と、

私は好うこそ拜したと思ひました。

古里や、元湯と云ふ村を通つて、鎮守の森へ、鯛がかしましくな
く頃を有村につきました。そうして、すぐと別荘守の女に案内せら
れて、初めて踏んだ、有村をなつかしいと思ひながら別荘へ入りま
した。

そこは松原の中にあつて、前には廣い海を眺め、且つて富士川丸
に乗つて、通つた、鹿兒島灣の入口の見ゆる所でした。薩摩富士も
見ゆるし、薩隅の連山も見ゆるし、それはくまことに、景色の好
い所でした。

契

私達は、はしやいだ日を幾日か送りました。けれども、一週間も立たぬのに、なんだかつまらないやうな気がして、早く御出になるやうに、御母様に姉は手紙を書きましたが、お母様は用事の爲め、當分は來れないと云ふのでした。

併し、まア嬉しい事には、私達は、隣りの別荘の藤代さんと友達になりました。藤代さんも一人で寂しい矢尖なので三人はいつもの

様よりも、もつと面白い日を送りました。

藤代さんは、私より三つ年上で、やはり京都の人でした。三人の京訛りに、村の人々の多くは、奇異の眼を以つて見、驚いた表情で聞いてゐましたが、三人はそんな事には構はずに、湯の中でも、水を沿びる時でも、はしやいで、大きな聲で言ふのですもの——。私は一番藤代さんになづきました。いつも藤代さんの別荘へ行つて家から迎が来るまでは、雙六をしたり、面白い噺を、藤代さんのお母さんから聞いたりしてゐました。

或る日——それは夕立の後の極く静かな夕方でした。私はいつもの様に、姉が机に向つてゐる間に、松林の中へ出て、徘徊してゐますと、藤代さんに會いました。藤代さんは、赤い表紙の本を持つて

何か小聲に歌つてゐました。

「綾さん、散歩？」

「はエ」

「じや、あつちへ行きますせう」

と、振りの長い袂で、かい抱く様にして、松原を出て、石の多い道を、小高い岡の、鎮守の森まで来て、その鎮守の社の椽に腰かけました。見下す家々には、美しい灯が燈されてゐました。

藤代さんは、やはり私をかい抱くやうにてそうして、さかしい、鳩のやうに、四方に眼をくばつて。

「綾さん、お願ひがあるの」

と、小聲に言ひました。

「何？」

と、私は大きな聲で言ひますと、

「まア、大きな聲。併し、聞いて下さるの」

と、言ひました、

「わ、何んでも」

「それ、ほんとう？」

「ほんとう」。

「まア、嬉しい事」

と、言ひつゝ、私の手を堅く握りました。私は何んの事が分りませなんだけれど、藤代さんは嬉しかったと見えて、黒目勝の眼に、感謝の色をたゝわてゐました。

「何んの事」

「今言ひますよ。さア、姉さんが待つてゐますから早く歸りませう」

と、再びかい抱くやうにして、元の松原へ歸つて來すと、もう四方は暗くなつて、物もさやかに見ないのでした。藤代ちゃんは四角な洋封筒を私に渡して。

「誰れにも見せないでね」

と、嚴く、口を禁めて、歸つて、ゆきました。

其夜は、姉も別荘守りの、お小夜もゐたので机の抽出に入れて寝につきました。此の間の様に、鹿兒島からお菓子が來ましたから、御出下さいと、言ふ位の手紙だろうと思つて、角別氣にも留ませないんだ。

翌日私は、誰れよりも早く起きて、抽出から昨夜の手紙を出して海邊へ出て、岩の蔭へかくれて、封を切りますと、中から床かしい香がして、薄桃色の紙に書いた手紙が出ました。

綾の助さん。なつかしい綾の助さん。

京と云ふなつかしい地を離れて、はるばると、此の南の國に來た乙女は、眞の友達とは、一人だつて御座りません。あなた、どうぞ眞の友達となつて下さい。三つ年上の妾、あなたを弟と思ひます。妾を姉と思つて下さいませ。

妾は只一人の娘の子、兄もありません、弟もありません。女の姉妹もありません。まこと孤獨の女です。

綾の助様、あわれと、御思召なら………。

御返事をまつてゐます。——。

私は讀み終つて、その手紙を寸々に破つて、海の中に投げ入れました。赤い紙が波の間に間に、彼方の方へ流て行くのを、私はそれをじつと見つめてゐますと、

「そこに居たの？」

と、肩をたたいたのは姉でした、私はさつきから、手紙を讀んでゐたのを、見てゐやしなかつたかと思つて、思はず上氣しました。私は恐ろしくなつて來ました。

「方々探したの、さア散歩」

と、二人は歩るき出しました。私は歩るきながらも、手紙の事が氣になつて、姉と並んで歩るいてゐるのが恐ろしい氣がしました。け

れど、姉の素振りでは、知つてゐるやうにも見なせないので、私は少しは安心致しました。

其日私は姉が湯へ行つてゐる間に、手紙を書きました。

藤代様——。

御手紙有難う。姉は此度の春に嫁いでゆきます。私は一人取り残されなければなりません。淋しい日を送らねばなりません。弟と思つて下さい——。

と、これ丈け書いて、お小夜に持たしてやりました。

お小夜は、夕方鎮守の社へ来るやうにと、書いた手紙を持つて來ましたので、いつもの姉の勉強の時間に社へ行きますと、もう藤代さんは來て居て、につこり笑つてゐました。

藤代さんは昨日のやうに堅く手を握つて、

「綾さん、弟」。と、細い聲で言ひました。

「姉さん………」

と、私も言ひ返しました。

二人は鎮守の社で、姉弟の契を結びました。何んの事か、私自身には分りませなんだが、兎に角、嬉しい氣が致しました。

三人の仲の好い事は、言葉にも、筆にも言ふ事は出来ません。或る時は、海邊へ出て唱歌を唄つたり、松原の中を徘徊したり、それから月の美し晩には、赤い毛氈を敷いて、舟遊をしたりして、五十

日の休みを暮しました。そうして、初秋の風が、畑の草の中の、蟲の聲に、哀れを増させる頃、又新しい船に乗つて歸りました。藤代さんは、他の船でしたけれども、同じ頃波止場へ着きました。

「さよなら、明日學校で會いませう」

「會いませう」

と、二人は別れました。姉は唯笑つてゐました。

私達は好く學校で、會う事の機會を得ました。時には藤代さんの家へ參りました。山の手の寂しい處にありまして、柴垣が廻されていかに神秘的な家でした。いつも藤代さんは、琴を弾じて居ました。私はいつでも、その琴の音を、じつと聞いてゐるのが、すきで、氣のふさいだ折りは尋ねて、弾じてもらいました。

千鳥と云ふ曲もすきで、それは、藤代さんの一番得意なものでした。いつかの學校の會があつた時、弾いてゐるのを、女の生徒連の後から見てゐましたつけ。

かくて拾壹月三日が來ました。

學校の例として、此の日は式後、廣いあの運動場で秋季大運動會が催されます。今年のは、なか／＼盛にやるつもりで、午後の競技のプログラムの中には、全校生の運動と云ふの、がありました。恰度落日戰爭中なので、男生徒は疑馬を作り、女生徒は看護婦でした。全校の男生徒は、敵と味方に別れて、幾組かの騎兵を作りました。

私は体は小さいし、それにさかしいと言ふので、疑馬に乗る事になりました。白い運動シャツに、白い帽子を被つて

——天にかわりて不義を討つ

忠勇無双の我が兵は

煥呼の聲に送られて

今ぞ出て立つ父母の國

勝たば生きて還らじと

契う心の勇ましや——

と、歌いながら運動場を一固する時、幾千の見物は、拍手して止ま
ませなんだ。

號砲一發。

最も激しい戦争は起りました。敵か味方か。白赤の帽子も見分け

かねる様な混戦で、樂隊は急激な調子ではやし、砲は度々なりまし
た。敵の帽子を七つも取つた私は、今や敵の大將に進もうとする時
後から來た敵に、白い帽はむなく取られて、地上に引きづり落さ
れました。其時進軍調のラッパがなり出して 最早や、激しい戦も
最後の戦でした、看護婦は、私を擔架に乗せました。

「あゝ綾さん」

「姉さん」

「幾つ取つて」

「七つ」

「まア好かつたわね」

と、こんな悠長な事を言ひつゝ、野戦病院に運ばれました。野戦病

院は、休憩室でした。

號砲一發

さしもの激しい戦も止んで、廣い運動場には、白や赤の帽子が二つ三つ落ちてゐました。急霰のやうな拍手が起りました、私は腕を切られたと云ふので、腕に白い繻帯を巻いて、元の馬に乗り、校長の前へ出ました。

私は傷したとは云ふものの、敵を七つ切つた功で二等賞でした、八つ切つた人が一等賞でした。私達二組は、美しい洋服をつけた樂隊士を先頭として、運動場を回りました。皆はほめて呉れました。私はナポレオンが歐州の全權を握つて、パリに歸り、パリ幾萬の人々から、賞讃の言葉を聞いた時の様な、心持になりました、静かに

ほく／＼笑んでゐました。

其夜、家へ歸つてから、藤代さんや、姉やら、勇ましい働き振りだつたとほめて呉れました。

年が明けて、まだ南國ですらうそ寒い頃を、姉は伊丹の或る酒問屋へ嫁ぎました。

「妾が、伊丹へ行つたつて、藤代さんがゐますから、淋しいことはありません」

と、泪で満ちた眼を拭いて呉れました。

「綾さん、妾がね」

ど、藤代さんは言つて呉れましたけれど、自分が眞の姉弟と別れる事の、そのいたましい悲しみは、他人に慰ぐさめられるやうな、そんな單純なものごちがいます。

あゝ。もう姉はゆきました。伊丹と云へば、幾十里の遠い所です私のやうな、かわい子供には行けるやうな所じやないそうです。「契つたどて、契らないどて、もうほんどうの姉弟ですわね」と、藤代さんは言ひました。そう、私達は、ほんどうの姉弟でした私はこれから姉さんと、呼ばなくてはなりません。

「姉さん」

「おう、弟」

ど、呼び返したのも、ほんのつかの間で、私は悲しい離別をしなくてはなりませんでした。あゝ姉さん藤代さんは、あの古い都へ歸つてゆかれました。噫！私は淋しい生活を送らねばなりません。別れた當座は、西の都とおぼしき空を眺めては、悲しさのあまり、泪を満して、なく事がありました。

さきに赤い帯の女と別れ、そうして、又藤代さんと別れました。私は此の時、私の身の不運を知りました。

其時は、私が十三の春でした。

秋
が
來
た

私は芝生に横はつたまゝ、じつと空を見つめた。

灰色に曇つた空から、にぶい太陽の光線が、崩れかけた土壁を静かに照してゐる。夏の名残の緑も大方黄ばんで、暗い築山の影から夏虫の聲が、死をかなしむやうに、哀れつぽく聞える。

電線に燕が留つた。

温い南の國を慕うて、海を越ね、山を越わて行くのたらう。

私も行きたい。

且つて話を聞いた。イタリと云ふ美しい國。美しい鳥が、緑の木の間に飛びながら、美しい聲で鳴いてゐる南洋。それは唯話で聞いた丈で、夢にすら見た事のない所だけれど、ほんとなくなつかしい。

「燕よ。僕も一件に連れて行つて呉れないか」

燕は、なんとも言はず、南の方へ飛んだ。

今宵の宿はどこだらう。

おや！

空がだん／＼險惡になつて来る。冷へ／＼する風が吹き出した。心の底まで泌み入るやう。

池に立つ小波がバケヤ／＼と聲をる、

手が土に着いたとたん、冷ひやりとした。

「噫、いやだ、地の底からだん／＼冷へて来て、自分は、こう横たわつたまゝ死ぬのではなからうか」

と、私はこう思つて不安を感じた。

石
工
の
死

冬の太陽が、心持よくぼかしくと、南向の仕事場に當つて、花岡石の碎けたのが、眼に尖く、ヒカしくと光ツてゐた。

信一は、石碑の面に金泊を入れ終つて、太い溜息をついた。と、同時に、眼がフラ／＼とくらんで、ぐつたりと、滑らかな冷めたい花岡石の墓石に顔を伏せた。と、柳子が幻のやうに現れはれた。やつれた青白い顔にうらみをふくんで、口唇の色を紫になし、黒い美

しい髪を、ばらくになして、苦悶の上旬の姿——恰度、此の間の新聞に、毒を飲んで、悶々死んだ時の有様が書いてあつたが——それに似た姿だつた。信一は頭から水でもかけられたやうに感じて、全身に粟が立つのを、おぼれた。その恐ろしい、うらみをもつた、柳子の姿がきになると、拾八の折りに、湖月の樓上で、短艇競争會の慰勞會の光景が、寫真でもみるやうに、はつきりと寫つた。そうして、千代葉の美しい姿までが、はつきりと見えた。彼は何んと思つたか、

「千代ちゃん」と、呼ぶと、

振り向いた顔は、柳子の恐ろしい顔だつた、

あつと叫んで、冷めたい石から離れた時、彼は初めて夢から醒め

たのであつた。

「あゝ今のあの恐ろしい夢。柳子はあれくらい僕を怨んでゐるのか」と、思うて、彼は身顛せずにはゐられなかつた。そうして、今完成た墓石の表面の、「高橋柳子之墓」と云ふ、金文字を見て、再び我れしらず身振した。

「仕上げました」

と、言ふと、暗い奥の方から養父が出て来て、碑石を見つめてゐたが、

「好う出來た。好う出來た。今迄からすると、つツと出來が好い。

今日は休んだが好かろう」

と、養父は賞めた。

まこと、信一が一心をこめて打つた石、一心をこめて刻んだ字、ここに悪いところがある。

信一は二階の自分の部屋へ入つて、ごろりと横になつたが、またしても、柳子の怨めしそうな顔と、千代葉の美しい可愛らしい姿が、こんがうがつて眼に映じた、彼は照魔鏡の前に立って、罪惡をことごとく、發かれる様に思つた。

信一は、其のいま／＼しい影を折ら拂ふと思つて、あせつたあせればあせる程、影はつきまどうて、しやうがない。それでも彼はやはり眼を閉じてゐた。そうして、はしなくも二年前の事が思い出された。

彼がまた中學校にゐる時分に、同級生の高橋の妹に戀せられて、

楽しい日を送つた。彼は、小説で見てゐた、楽しい戀と云ふものを實現させた。けれども、戀と云ふものは、例へば燐のやうなもの。パツと燃へ上つたかと思つと、すーと、消えてしまふ。實に戀とは運命よりもはかないものである。信一の戀もそうであつた。それは丁度同じ年の秋、短艇競争會の慰勞會が湖月の樓上に開かれた。發起人の演説や、其他の人々の隠し藝などがあつて、昨年より盛んだと云つて、思う存分飲んだり食うたりして散會した。彼は中川と離れに二次會を開いた。そうして、まだ一返も見た事のない千代葉を呼んだ。明るい電燈の下に、艶めかしい千代葉を見た時、彼はもう柳子を忘れてゐた。忘れられた柳子は、幾度も幾度も、手紙を送つたけれど、一向返事がないので、うつら／＼と日を暮してゐた。

或る日彼が出やうとすると、柳子から、宅に誰もゐないから来て呉れと云ふ意味の手紙が来た。彼も一べん位は合はなくてはと思つて、行くと、待つてゐたらしく、やつれた顔に笑を浮べて。

「待つてゐたわ」
と、云つて内へ入れた。

千代葉とくらべて、柳子がやせこけて、もとのやうに美しい姿を見る事の出来ないのを不快に感じた。けれども、出来るだけ平氣を装うて、

「すみませんね」と投げやる様に言つた。

「手紙来て」

「来ました」といやな顔をした。

其夜は柳子が會いたい會い度いと云ふ、一念をどゞけさせる爲に義利で會いに行つて、不快を感じて歸つて来たが、氣がくしやくしてならないので、湖月へ行つた。千代葉に會つて、しんみりと話した、そうして、ひよいと門を出ると、ぱつたり先生に會つた。兼ねて注意されてゐるので、翌る日はすぐ處分をうけた。父は怒つて家に入れぬと云ふのを、伯父があやまつて、改めて養子として貰つて、伯父の業をついで石工となつた。柳子は此の事件をきいて、病氣になり一年半も病床に横わつてゐたが、劇薬を飲んで、自殺した。信一の事を忘れる爲に――。

回想の絲はふつと切れた。頭が妙に痛むのを感じた。

「信ちやん御飯よ」と、下から誰かが呼んだ。伯父に心配させない

と思つて、下りて、皆の石工と一件に食卓に向つた。うまくもない飯を強いて食べた。

「信。墓立てに行つて呉れ」

と、伯父が云ふので、徳に車を引かして、新吉と、松二を連れて家を出た、

彼はうつむき強に、車のあとから歩いた。

墓場には、高橋君も来てゐた。

「信一君、御苦勞だつたね」

「いいね」

と、信一は淋しく笑つた。

皆に手傳つて貰つて、花岡石の墓石は立つた、彼が一心をこめた

作、これがどうして悪からう。皆賞めぬものはゐなかつた。

彼は歸つても、暗い二階に、感ぜるともなしに、じつとして、足速に暮れゆく、冬の日の空合を見つてゐた。

「信さん、暮しやう」と、松二がやつて來たが、する氣にならぬと斷はつた。

日がとつぷり暮れると、「一寸出て來ます」と云つて、ぶいと出て行つた。

信一の姿は、湖月の離れ座敷にみとめられた。勿論千代葉も待つてゐた。

「さア、今夜はたんどおあがり。久し振りですものね」
と、千代葉は笑つてみせた。

「永い間會なかつたね」

「永い間。毎日毎晩待つてゐたわ。辻うらも幾篇も買ったけれど、待人來らずですの」

「そうか」

と、信一は、ぐつたり首をたれた。

「いやに今夜は沈んでゐなさるわね。どうかして。ね、どうかしたとおツしやるの。妾の爲に、學校まで出されたのですからね。どうぞかんにんして下さいよ」

と、千代葉は怨めしうに言つた。

「何をツ、馬鹿な。お前もこんな商買をするのに、にあわない野暮な事を云ふね。僕は決して、そんな事で沈んでゐやしない、それ

はね……………」。

と、言ひかけたが、口をつぐんでしまつた、

「それがね……………」それから後はどうしたの」

と、千代葉は急激に突込む。

「何さア、金の工面が悪いツてことよ」

と、ごまかして、しいて笑つて見せた。

「そう」。

「おい、何か弾いて呉れ」

「何を？、黒髪？」

信一は、ごろりと横になつた。彼の女は座蒲團を枕にして呉れて、
そうして、細い音緒で弾き出した。爪弾の三味は、妙に氣を滅らし

むる、彼は、うつとりとなつて聞き入つたけれど、それもつかの間で、柳子の事が頭に往來した。

「何の爲めに、此處へ來たのか。恐ろしい心持から脱する爲に來たのじゃないか」と、彼は心の中で叫んだ。かれは、千代葉の側にもたらぬ程、柳子の事が思い出された。

「もう歸る」

「早いわ、あなた」

「明日來るから」

と、信一は湖月を出た。千代葉はせつかく來たものをと、うらめしそくに後姿の消えてゆくのを、じつとながめてゐた。

信一は暗い道を歩きながら、晝考いた事を繰り返してゐた、そう

して暗い中を、柳子の墓の前へ來た。失くなつた靈がなくのかのやうに、松風の音が、悲しきようにも、うらめしそうにも響いた。

「死人があつたそうですね、腹切りが」

「どこです」

「墓地で」

「どんな人」

「石工だそうです」

「まア此の暮れになつてからね」

「金の工面が出来なかつたからでしやうよ」

病
の
後

斯んな會話が、暮れのせわしい町々につたわられた。

醫者の許が出たので、一週間振りに戸外へ出た。

室の中で、秋の淋しい聲をきいたが、外へ出て、聞いたのは、始めてある。

高く高く澄んだ、秋の夜の空には、十三日の月が輝いてゐる。

其の光が、骨までしみ通るやうな光である。

重い重い秋の大氣をふるわして、辻うら賣りの悲しい、救を求

めるやうな聲が聞ゆる。

町へ出た。

賑やかな町へ出た。

店頭ランプや、電燈の光が、華やかな春の夜の光のやうに思はれてならない。永く町と別れてゐた精でもあらう。しかし春のやうに、あまり華やかでない。

黄色い濁つた光である。又、春のやうに、香油や、おしろいの香もかげない。そこが秋だ。

黄色い葉が、はら／＼散る柳の下で、青年が、野口男三郎の歌を唱ひながら賣つてゐる。買人は一人もない。青年はあれで食はれてゆくだらうか。どうして暮してゆくのだらう。あんな立派な

体をして、何か他に好い商買がありそうなものだ。と斯う思つてやはり聞いてゐると、其青年の連らしいのが、ヴィオリンを弾ま出した。むせぶやうな、悲しい音。——私はそれを聞くのがいやさに其所を去つた。そうして、暗い町や明るい町を、足の勞れるまで歩るき通した。

熱の出た上旬なので、喉がかはいて、今にも息が切れそうになつた。水道のある所をみつめて、其のに、に私の口を付けた………其眸間の冷たさ………戀さめた女の肌にさわるやうに感じた。

水無月の林歩めば切採の陽に匂えるもかなしき一つ
あはれごと人に言はれて答へなくうつむく顔に早や湧く涙
これそとも言ふべき事もおもおえず君のかたをにさしくみくってみる
ついそなき嬉しき消息くりかゑし讀むや歎きに馴れし心
根上りの松の根方にさひしをよせて日待つ海のしづけさ

(笠間小石)

漂浪の旅に出る前夜

私は常に、私のまだ旦つてみた事のない都會、村落、神社、佛閣、山、川、海、そうして、旦だ見たことのない風俗。それらを、見たさに旅に出やうと、幾度かくはだてたが、實行することは出来なかつた。

然し此度、私は的ない旅に出ることとなつた。

仕度としても何もない、此の体を持つて行く丈けの事である、

で、旅に立つ前夜でも、いつもとかわらず町に出た。

私は町の入口の橋の上に立つて、じつと、黒い水面を眺め入つた。星の光と、私の感覚によつて、水は東の方へ流れてゆくのを知つた。清い水だらうと思つた。

此の水のやうに、的もなく、自由に流れてあるく、明日からの旅を思うと、水がなせか道伴のやうで、なつかしく思はれた。

私はいつまでもその行衛を見守つてゐた。

此の水の流れ、海に入る處は、紅燈緑酒の巷である。目を見張ると、高い大きな家から、秋らしい感じをあたはる、なつかしい灯見はる。今頃は、漂客の群が幾組も、美しい罪惡をなさんと、さまやうてゐるであらう。

秋の大氣を破つて、陽氣な太鼓と、鐘と、三味線の音が、響いてくる、漂客の楽しい心持を想像して、味氣ない日を送つてゐる、私と云ふ者を、不甲斐ない者と思つた。

「楽しみを知らぬ馬鹿ッ」

と、自分で、自分をしがつてみた。

まだ騒がしい音がきこはる。

私は歩るき出した。

見上げる空に、天の川は明らかに、幾萬の星は輝き渡つて、今にも降つて來そうな工合である。

星が一ツ飛んだ。

「あゝ明日は天氣か」

と、私はこう言ひながら橋を渡つた。

幾萬の冷れた薨、瓦をなでた風が、私の襟をなでた。

明日からのもない、自由な、漂浪の旅に行かねばならない。

漂浪の旅に出る日

「若き旅人よ。此宵の宿はいづくなりや。連れの衆は居給はずや」と、姉にからかわれて、家を出たのは、好く晴れた空に、乙女の瞳の様な明けの明星と、研鎌のやうな月が、冷っこい光をなげてゐる五時過であつた。

私の心は躍つた。

小鳥の様に、自由になるのだ。

私は小走りに、白い息を吹きながら、ステーションに來た。
私には相應しい、赤い切符を買ふた。發車に拾分の間がある。
告知板の前に立つて、何か書うとしたが、無意味なこと、思つて止めた。併しなんだか書き度い。

發車のベルが、がらんとした、停車場の構内から、まだ眠りから醒ぬ市街に、心持よく響いた。

赤い線の入つた客車に乗つた。

今更のやうに旅愁と云ふことを感ずる。

四方を見渡しても、知らぬ人ばかり、知つてゐるのは、櫻島と、
錦江灣の水。

ピリピリ／＼……………、驛長の笛、ガタン、ゴトンと、瀛

車は動き出した。

あゝ、もう鹿兒島の市街は遠ざかつてゆく。

さらばなつかしき、鹿兒島の市街よ。

Sよ。

足なへてやむ菱歌兄よ。

新しき藝術に酔へる蒼水兄よ。春鳥兄よ。

鐵道工事が傳へる悲哀の槌を聞いてゐる湖村兄よ。

藝術の讚美者なる春村兄よ。

さらば、

山よ、

川よ、さらば、さらば。

私は、皆の者に別れをつげた。私は無事で、今叫んだ人達や、ものに合ふ事が出来ればよいが。

京町の燕へ

燕よー、

僕は君から、京町のたよりを手にした時、言ひしれぬなつかしさを感じた。そうしてそれは、又と得難い慰安で、且つ苦痛であった。君は知るまい。否、知つていやう筈がない。僕は病氣なんだ。それで今年のポートルースには出漕しないことにした。練習日記や實況を報じて呉れと云つたが、練習日記は駄目だ。併し實況丈

けは報ずるよ。鶴首して待つて居給へ。

燕よー、

僕は來年のレノスまで、重い重い苦痛を持つてゐなくてはなこない。僕が出漕せない爲に、K君は、ごうごう撥せられてしまつた。僕は實に氣の毒でならぬ。少し心中を察して呉れ給へ、僕の代りにH君が漕いで呉れる。H君は前途有望な漕手だ。君が知つてゐる時よりも、よほど上達して、學校の選手として出しても好い程だけれども、舳手にはAと云ふ老練家がゐるから、學校の選手まではないくまいよ。

燕よー、

夢二畫集花の巻を送る。大きい目の人を見て呉れ給へ。僕は夢二さんの繪はなんともなくすぎだ。——やわらかい線、大なる眼、しなやかな指、——君も好きだと言つたつけね。

僕は近頃、品子さんの堅い歌よりも、夢二さんの歌がすさになつた。何故だか自分にも分らない。これを理解することの出来るのは、いつのことであらうか？

燕よー、

僕は椰子の繁りに月の照つてゐる南洋へ行くよりも、コスモスの

亂れ咲いた君の家へ行きたい。病氣が全快したら來るかもしれない。其時は何よりも、君がちからめて書いた無聲詩を、見せて呉れなくてはならない。君が昨年別れの時に、記念だと云つて書いた「ダリア」は、やはり書齋へ一段の光彩を添へてゐるよ。

燕よー、

氣の小さい僕は、じつと寝てゐると、色々なことを思ひ出したり考へたりする。

いつか君と有村へ遊んだ時、鎮守の森の青草の上に寝そべつて、將來を語つたことがあつたね。それがいつも僕の頭を、くせく

させる、僕あの時言つたように、立派に成功するだらうかと、僕自身をうだがつてゐる。噫、僕もとう／＼弱い男となつてしまつた。

燕よー、なつかしい燕よ、

僕の高ぶつた神経は、思つてゐる事を、思う様に、言表わす事は出來ない。後前のわからぬ文章——君も讀みにくいだらうが——を、訂正する丈けの勇氣がない。牛乳と卵で、生命を絆いでゐるのだもの。あゝなつかしい燕よ。

是でお別れとしさう。

夜が明け放れやうとしてゐる。

夜具の中から、頭を出して、明り取りの窓を見ると、もう木の葉の動いてゐるのが、はつきりと見える。私は起きて、手早く着物を着替へて、昨夜、机の上に置いた、手帳と紙入と帽子を取つて、二階を下りた。

ミシリくと、狭い階段が音を立てる。家中の者が起きやしない

かと思つて、氣が氣じやなかつた。門のくぐりを開けて、通りへ出るど、夏の朝風が、心持よく顔をなでた。私は足を早めて、停車場へ來ると、もう瀛車は出やうとしてゐる。驚いて切符を買つて、車へ乗ると、同時にほつと、深い溜息をついた。

「もう大丈夫だ」

ど、こう思うと、昨夜から一睡もしなかつたので、ともすれば眠りがつきまどう。

重富と過ぐる頃、とある農家で、小供が顔を洗つてゐるのを見て自分はまだ洗はないのだと思つて、おかしくなつた。

國分の驛へついた。

私はあの女が來て居やしないかと思つて、四方を見廻したが、そ

れらしい影もみになつた。がつかりして、構内のベンチに倚つてゐると、向うから、車を急がして來る女がある。それはあの女だつた。「どうしてゐたんだ。遅いじやないが」

と言ふと、

「御免よ。つい寢過したんですもの」

と、女は笑つた。

二人は停車場を出た。

「宿屋はどこだ」

「ついそこなんですけれど、ここで休ませう」

と、女は言つた。私達はとある家に入つた。私はそこで顔を洗つた。「御飯食べて」

と、女がきく。

「まだ。お前は」

「妾も。じゃ二人で食べませう」

と、女は注文した。

まづい朝食である。一杯食べて女の膝を枕にして、寝入ってしまった。昨夜の睡眠不足が襲つて来たのだ。

「もう起きなくて」

と、女が起した時は、もう午近くであつた。

「どこに行かうか」

「さうね」

「面白い處はないかなア」

と、私は女の顔をじつと見つめた。女は黙つてゐる。まだ掻き上げないと見えて、髪がだらしない風に見ゆる。

「おい髪を直してはごうだ」

と、私が言ふと、

「急いで来たんですもの」

「急がなくつても好いじゃないか。一体昨夜何時に寝たんだ」

「昨夜ね。まんじりともしなつたの。それから、夜明け——何時だつたつけ——そう四時頃一寸とろくしてね、一番が来た時、あの笛で起きたの。だらしないでしやう」

と、女は髪を巻きはじめた。私は又、眼をはなさないでながめ入る。手際よく、美事な束髪が出来た。そうして、一寸懐中鏡を出して、悪

い所を直した。いつもおしろいを付けてはいけなさと、私がやかましく言ふので付けてゐない。私はそれが嬉しかった。

「これなら好いでしやう」

「好い風だ」

ど、あまりよくもなかつたが賞めてやつたら、女は嬉しそうに笑つた。私は又寝込んだ。そうして、目醒めた時には、もう四時だつた。女は居なかつた。女中を呼んで聞くと、××屋へ行くと言つた。私は彼の女を呼びにやつた。女はすぐきた。昨夜の勘定をして來たと云ふ。

「随分およつていらつしやつたのね」

「うん。四時間……そうか五時間位寝てるね」

「こうしてゐても、つまらなわね」

「じやどこにゆくのかね」

「どこにでも」

「どこにでもと云つたつて分らないじやないか」

「じや言ひますわ、妾、霧島へゆき度いの。而して、あの煙の出る處が見度いのです」

「馬鹿な。あんな恐ろしい處へ。然し今夜、加治木へゆこう。そして………まア兎に角加治木へ行こう」

「わ。ゆきませう」

女はもう同意して、用意した。

「まだ早いよ。日が落ちてからだ、僕はもう一時間程寝やう」

ど、私はごろりと横になつた。

瘋車の中で二人は差し向ひに座つた。

稲田の上を上つた夏の夜風が、心持よく頬をなでる。じきに加治木へ着いた。

荷物も何もない二人は、肩を並べて歩るき出した。

町々の灯は華やかに見えた。明日を天氣だと意味する星は降るやうに出て輝いてゐる。

「ごうちらわゆかうか」

ど、とある十字街に立ち留つた。

「どにかく、橋の方に行つてみやうや」

ど、二人は又肩をならべた。

「今夜どこに宿まらうか」

「そうね」

「宿屋はどこでも聞けば分る、お前お腹が空きやしないか」

「は、大分」

「じゃ、どこかわゆかう」

ど、二人は「鰻屋」へ入つた。むさくるしい家だつた。綺麗な女がゐた。二人をしげしげ見てゐる。

夕食をすまして二人は黙つて座つた。

「お銚子は？」

と、女が——此の家の——きいた。

私はひよつと飲んでみる氣になつた。

「止した方が好いわ」

と、女は言つた。

それでも女と二人で三本飲んだ。じつと眼をすわると、女の美しい顔に、ほんのりと紅潮して、ふるいつき度い程だつた。

勘定する爲に私は五圓紙幣を出した。

夫れは、伊丹の姉からの無心の金である。すまないやうな氣がしたが………。

二人はそこを出て、又歩いた。異なるものを見るやうに、珍らしさうに皆が振り反つてみた。

「なんだかはずかしいわ」

「なんの。」

と、云つたものの、私も少しは、はづかしかつたのだ。で、〇〇と

云ふ宿へ入つた。

「鰻屋の女は小奇麗な女でしたね」

と、女は笑つて言つた。

「うん」

「何んだか見たやうな人だつたけれど」

「僕もそう思つてゐた」

「どこかで見えたやうだ」と、私はつけくわわした。

「妾もそう思いますけれど。」

「もうそんな事はどうでも居い」

「でも、なんだか氣になるやうでね」

と、女は笑つて、じつと洋燈を見つめた。

「もう寢やう。」

「寢ませう。」

女中に夜具を取つてもらつて寢たが、私はどうしても寢られない。

女は鰻屋の女の事を思つてゐるのだらう。やはり目を開いて
ゐた。

あゝ姉の五圓紙幣はくづれてしまつた。

若い狂人

空は灰色に曇つて、月は淡な光を下界に投げてゐる。西の山の山
ぎは一帶が白く見ゆる。太陽が沈んで間もない。

若い狂人は、セルの着物に縮緬の兵兒帯をしめて、洗足で沈みが
ちにとぼく／＼と歩いてゆく。やがて海岸の岸の上に立つて、両手を
上げて、荒れ狂う青黒い海を眺めた。

「海！、貴様なんだ。人の妻を呪うなんて……」。

狂人は大きな聲で泣いた。

「妻を……………露子を取つて喰うたな……………こら
海……………おう露子泣くんじやないよ、早くお上り、人が見て笑つ
てゐるよ。秀坊も」

「死んだがどうした。ハハハ……………何だ馬鹿馬鹿しい。おれも死な
うか……………いや死ぬまい」。

「霧子も秀坊も、きつと泣くにちがいない……………おい死んでし
まね……………ハハハ……………」。

月を仰いで、又海を見て、

「おい露子秀坊……………右向ケ右……………前へオイ……………
……………三番銃口上に」

狂人は両手を振つて、歩るき出した。

「廻れ右前エオイ……………おう露子秀坊……………なんと面
白からう……………勞れたつて……………初年兵のほやくは、強行軍
はあまりにつらいわい……………露子なせ死んだ。馬鹿めツ、敵は向
うの森に居るんだぞ……………何にツ退却したツて……………ハハハ……………浪
めツ」

冷めたい石の上に座して

「さよなら露子、秀坊……………歸らうか……………歸らんで、露子秀坊
が、こんなにあだをこねてゐるよどうしたものだらうね」

憐れなる陸軍士官の狂人は、大きな聲でなき出した。

しめやかに月夜の風がをとづる心もとなき桐の光葉

しめやかに夜を降る雨が思はする思ふ一人に別るゝまざわ

笠間小石

鬼
般
長

北海道松前から、正月の品物を仕入れて来た、加賀屋の天神丸が五隻、北國のすごい風に帆をはらんで、七尾の港に碇を下したのはもう雪のちらつく、拾壹月の中旬であつた。

七尾の港には、松前の品物が、山の様に積まれた。水夫達は晝の内は汗を流して、陸上に目の廻るやうな思いをして働いて。そうして夜が来れば、彼等は言ひ合はしたやうに、七尾の町へ上つて、酒

と女を買に行つた。板子一枚下は地獄と云ふ、恐ろしい帆船の生活になれた彼等でも、陸地が戀しいのだ。

明日とも知れぬ、命を持つてゐる船員の金使はひ、驚く程荒いものだつた、就中加賀屋と來ては、實に豪氣な水夫達許り居た、船は五隻もゐるし、給料もよかつたので――。

水夫達は毎夜が程遊んだ。かくて金を散らした頃には、もう船は出帆したのだ。

第一天神丸を先頭にして、五隻の船が出て行くのは見物であつた船は輪島へ向つて航海してゐる。

其日は上天氣だつた。

日本海の波は靜かに、深い碧色をして、白い羽の海鳥は、夢見て

ゐるやうに、彼の上をゆつたりと飛んでゐた。水夫達は帆の影に寝轉んで、たのしかつた過去の夢を語り合つてゐた。

其時船尾の方で

「女ッ」と、熊吉の聲がした。皆は熊吉の方へ走り寄つた。其處には、七尾の町の或る料理屋の女がゐた。

「何故來たのかい」

「女のくせに」

「逃げる氣か」

「女將さんが強く當るだらう」

斯んな事を言つて水夫達は尋ねた。女は黙つてうつむいて泪をながしてゐた。水夫達があまりに、きつく問いかけるので。

「妾、清さん……………」と、女は小さな聲で言つた。清さんは此の第五天神丸の船長であつたのだ。三十位の男で、且つては瀬戸内海の、とある商船學校に居たことのある、極めて温厚な人であつた。水夫は船長に知らせた。そうして、熊吉は尖つ口調で、

「頭ッ荒れませうせ」

と、言つた。

船長は黙つてゐた。日がどつぷりくれてから、船長は水夫達に酒を飲まして、堅く口留をした。水夫達は思う存分飲んだ。

夜に次第にふけてゆく。

船長は女に輪島から歸るやうに言つたが、女はいツかな聞き入れなかつた。一件になれぬなら、水に入つて死ぬとまで言つた。そう

して又思い直したやうに、

「腹の中の子供が可愛憎と思召すなら……………」

と、言つてないた。女は身持だつた。

船長は驚いた。で、(伴れてゆく) ときつぱり言つた。翌る日は非常な大暴風であつた。

北から吹いて來る風は、身を裂くやうで、それに細い粉雪を交つて、一寸先も見ぬ位であつた。小さな帆船は木の葉の様に漂はされた。それに帆柱は折れ、帆は破れ、舷は波に碎かれ、伴れの船にはぐれてしまつた。水夫達は、もう日がどつぷりくれた時には、朝からの働につかれて綿の様になつてゐた。けれども一寸とも休むことは出来ないのだつた。彼等は運命を天の神にゆだねても、やは

り生きたいのだつた。かくて勇ましい働きが始いらんとする時、船長は

「のろし……」

と、叫んだ。船からは、合圖の煙火が打上げられた。鐘はたゞかれた。やがて是に應ずる聲がした。人は嬉しさのあまり、自分達が今危険な位置にあることを忘れた。併しあゝ、船は刻一刻と、打ち碎かれた舷から水が浸入して沈んでゆく。もう水夫達の運命は、今の烽火に答へた船が来なければ定まるのだつた。

あゝ幸。親船が来た。沈みかけた船から皆はすくわれた。勿論女もすくわれた。

灰色の空ひくゝたれた、北國の海を、大きな帆前船の親船は、さ

したる事もなく輪島の港に入つた。

附屬してゐた船も入つて来た。三日目には皆の船は揃つたが、第五天神丸は居なかつた。此の港でも荷物を陸上して歸ると云ふとき、七尾の女は男子を産んだ。それが榮造であつた。

榮造は、袖の浦丸の船長である。親の意志をついだ立派な船長で、ごんな大暴風の日でも船を出帆さして無事であるのを、人々は不思議に思つてゐる。人々は彼を鬼船長と云つてゐた。

鬼船長は或る航海を終つて、歸つて来た夜、此の話を母からきいてないてゐた。

あゝ鬼船長！、彼の姿は南洋の航海から、再び見ることは出来なかつた。

ここ岬波のしぶきにぬれもせでひくう飛び交ふ白鷗の群

是枝紀風

数々のかなしみすて、若人にたよりする日の物の静けさ

草踏めは草の匂ひの身にしみぬ我が足の傷の今はた寢し

かりそめに酒の味を知りたるを十九の夏の悲しみとする

原口書葉

ま
ぼ
る
し

瀛車は八代の驛を出てから、玖磨川の急流に沿うて走つた。

長い長い旅に、倦み勞れた人々は、薄暗い電燈の光で、旅行案内の發着時間表と、時計とを出して引き合はせながら、刻一刻と鹿兒島の地をふむのを楽しみにしてゐた。

(もう六時間走つたら歸れる)

と、誰かが斯ふ言ひふらすと、今更のやうに、急に車の中が賑やか

になつた。眠つてゐたものは目醒め、楽しかつた過去を、夢の様に
迎つてゐたものは、はかない空想から醒めた。そうして、皆の口か
ら、面白そうに軍歌が歌い出された。

治雄は唯一人、語らう友もなく、車窓に倚つて、次第次第に暮れ
ゆく、四方の景色を眺めてゐた。

黒すんだ肥後の山。黒い水——その恐ろしい水の音は、なせかし
らぬ彼を悲しく憂せしめた。

汽車が走るにつれて、夜の暮は下りてゆく。川の岸の家の赤い灯
鮎取る舟の灯。それを彼はじつと眺め入つた。

「何感わてゐる人だ。もう五時間で古郷だぞ」
と、友の古田が肩をたたいた。

(嬉しいかい)と、治雄は、彼のうれしそうな顔を見た。

(嬉しいさ)と、彼は又他の方へ歩いた。

切角好い話し相手を得たと思つたら、もう歩き去つてしまつた。

彼は手中の球でも取り落したやうに、ぼんやりなつて、暗い闇をな
がめた。機関車の煙筒あからの火の子が、螢のやうにこんで来る。

治雄は眼を閉じた。

十日間の事が思ひ出された。彼には、大阪や京都や神戸の、華や
かに明るい町は、たまらない程なつかじかつた。いつまでも、いつ
迄も、あゝして、歩き廻つてゐたかつた。心配も苦勞もなく、小鳥
のやうに縦放に、自由に。——彼は千日前の、兩側に軒を並べた活
動小屋も、一つ一つのぞき廻りたかつた。面白い樂隊は心をそゝ

らせた。辨天座の、床かしいオーケストラにも、彼は耳をかたむけた。

斯んな事をくり返して感わてゐると、瀛車は鐵橋に差掛つて、回想も其恐ろしい音で、破壊してしまつた。彼は眼をすわて暗の中を見つめた。

幻のやうに、家庭の有様がうかんで、ものやさしい父の顔。凄い程恐ろしい母の顔、妹の無邪氣な顔、そうして、父の居ない時を、當り散らす、恐ろしい母の聲が耳に聞ゆる様であつた。

「あゝいやゝゝ、もう家へ歸るのはいやだ」と彼は心の中で叫んだ。彼は幻を打ち消そうと、あせつたけれども、あせる程、益々思い浮べられた。

瀛車は寂しいといある驛に留つた。腹が空いた彼は、辨當を買つた。彼は飯べながらも、又冷やかな家庭の事を思ひ出した。今夜の十一時には、不規則な冷やかな家庭の人となるのかと思つて、いつまでも、此の瀛車が鹿兒島の驛に着かねば好いがとも思つてみた。そして又楽しい旅に心は走せた。蘆邊倶楽部の活動は面白かつた。此處で蘆邊躍があるのかと思つて、なつかしくてならなかつた。出雲のまむしを喰べに行つた時、道頓堀川の川沿の家々から、赤い灯が、黒い川の水に寫つてゐたのを好いと思つて、じつと見つめてゐた。朝、高津の宮へ行く時、安井の稻荷に朝参りする女達を見て、知つて居るのは居ないかと、宿屋と宿屋の間の細い川へ下りる石階段の處から見てゐたが、よく繪葉書でみる、何んとか言ふ女を一人知つ

てゐた。

京へ行つて、従弟のSと合つて、家庭の事を話すと色々同情の言葉でなぐさめて呉れた。京極もよかつた。清水の舞臺からは、雄大な景色が見えて、狭い心を大きくなすやうだつた。

「此處から飛んで死んだらね」と、云つて笑つた。見物に来て居る人が、異な目附をしてゐた。八坂の塔が青葉の間から見ゆるのを、水彩畫としてみたかつた。古風な雅びた格子の多い町は、住みやすいやうにも思はれた。

瀛車は又止つた。夢から醒めたやうに彼は四方を見廻した。

刻一刻と瀛車は鹿兒島へ近づいて行く。

皆は一齊に又軍歌を歌い出した。治雄はかなしくなつて、泪でう

るほうた眼を、窓になげた。煙筒の火の子か螢のやうに飛んで行つた。

瀛車はきしりながら急速に走つて行く。

都
の
姉
へ

おん姉上さま。

なまめかし三味線の音と、若い美しい女達の住む巷に別れて、山の手の詫しい住所に起き伏す身となつたのは、此の秋の十月——旅行から歸ると直すぐでした。いつも春のやうに陽氣で面白い處にゐた身か、急に淋しい處へ來たので、なんとも云はれない感じが、胸のどこからともなく湧いて來ます。ことに夕方、狭いですけれども

黄菊、白菊の咲き亂れた庭に立ッてゐますと、城山の山風か吹いて来て、身に沁みるのをおぼえますれば、御母上か戀しくなつて、宅へ歸り度いやうな氣になります。父を忘れた私達は、何かにつけて母上か戀しいのです。昨日もお母上様か御出になりました、御父上様の油繪像を持つてこられて、「御父様に、お前の大きくなつたのを、見せて上げ度いね」ツて涙をふいて、ゐられました。私は御母様の泪を見ると、自分で悪いことをしたやうに、實にすまないこと云ふ感じか起ります。

近頃は、私の學期試験と、本宅の改築の爲に、御母上は、お見ねになりませんか、此の間までは、水曜日と、土曜日に、御出になりました。そうして、例の太平記と、源氏物語と、平家物語の處處を

教はりました。西鶴や近松は、まだ早いツて、なかなか教はて下されませぬ。姉上は、私の年頃には、教はつたと云ふじやありませんか。何故、私には教はて下されないのですやう。私は不思議でなりませぬ。

昨日は、夕方、散歩してゐますと、みごりが來ました。此度、女優になるそうです。それはしつかりしていませんが、大學へ入つて好いか、女優になつた方が好いかと尋ねましたから、大學へ入つて女優になれと云ツてやりました。けれど、みごりは年の事を苦にしてゐました。年たツて、まだやつと、十九じやありませんか、大學を卒業してから成ツてもおそくはないですね。あの女は、もうすゝなるやうな事を言つてゐました。

私はみどりの性質を好く知つてゐますから、勝手にさしました、きつ成功するでしやうよ。品行もよし學術も優等だし、藝事も素人ぬけがしてゐますからね。私はみどりが立派な、女優となつて、檜舞臺の上で一日も早く評判を取らんことを祈ります。

もう女流文學家が、大分頭を上げましたね。青鞥などと云ふ、産物が出来ましたから、馬鹿には出来ません。同人は子供のやうに育てやうと、云うてゐますから、今によくならませうよ。のぞいてみても、さして悪い作もありませんね。

近頃、作がみへませんが、ごうなされました。當地に、錦江座と云ふのが出来るそうです。まだ俳優を河原乞食か何の様に思つてゐる人々には、ごんな立派な劇場が立てても、ごんなに立派な俳優が

來ても駄目な事です。

長い間、他國と交通しなかつた精でもありませうがあまりに不文明じゃありませんか。みどりも、或る先生から、河原乞食になるのかと、言はれて腹立しく思つたそうです。中等學校の先生からが、そう言ふのですものね。

あゝ長いぐをら書きました、御免下さい。

平

氣

長火鉢の前に、二人は差し向ひに座つた。

私は、火鉢の椽に、頬杖をついて、女の顔を、しげしげと見入つた。昔と少しも變つてゐない。まだ乙女と云ひたい所がある。

私より一ツ年上だけれども、どこか大人謳てゐる。女は平氣で、煙草を吸つてゐる。いつの間に吸ひならつたのだらう。

「もう五年になりますね。お別してから」

恰度、別れる時のやうに、しんみりとした調子で言ツた。昔を思い出させるやうな口調。

「五年！、そうなるかな」

と、私も平氣を装うた。

五年前の、熱い戀と云ふことは、少しもあつた様じやない。

「あれからお前、ごこへ行つたんだ」

と、私は突込むやうに言つた。

「あれからね。京へ行きました。」

「足を洗つたかい」

(いゝわ)

(お前、足を洗つて、もうこんな商買はやめるツて言たじやないか)

(でもね。やめられないの。家の都合や、何やらでね)

(そうか。それから)

(京へ二年程居て、奈良へ行つたの、そこで三月ね)

(三月?)

(其、親方ツてのが、やかましのでね、それから、和歌山へ行きました)

(神戸へ居たツて言ふじやないか)

(わ、二月程、神戸へ行きました。ごこも不景氣でね)

と、私はじつと、女の顔を見つめた。

尻の軽い女だと今更のやうに思ツた。

男をなんとも思はず、たらして歩いた此の女が、恐しいものや

猪

うに見わた。

女はやはり煙草を吸ッてゐる、

二時間目の始業の鐘は鳴った。

私達は吸い込めるやうに教室へ入った。やがて、福崎先生が、掛
圖と教本を持って、入って來られた。

「此度は理科の時間です。皆さん、本をお出しなさい。——二十八
頁、豚の所です」

と、福崎先生は、豚の事について、丁寧に教わられた。

「皆様、猪は何種類に屬してゐますか、知つてゐる人は、手を上げて……青山さん」

「猪は、猪族に屬してゐます」

と、青山は勢よく答へた。

「ちがいます。外に出来る人……木内さん」

「それは獅子族です」

と、私は答へた。

此の答に、生徒から先生まで、一度にドツと笑つた。猪だから獅子の種類だと、一圖に思つてゐた、私は何故に彼等が笑うのか知らなかつた。

先生は徐に口を開いて

「皆様の答はちがいます。」と、掛圖を掛けになつて、「此の圖を御覽なさい。是れは、猪の牙を取つた所です。豚と好く似てゐるでしやう。猪は、豚と同じ種類のものです」と、言はれた。

終業の鐘がなつた。

私達は、先を競うやうにし、運動場へ出た。

「やア、猪が獅子だと、鼠は馬だらう」

と、皆は私に、からかい初めた。

私は泣き度い程、くやしかつた。言葉は喉まで出てゐても、彼等の大勢に向う丈けの、勇氣はなかつた。「そうだ。此の以前、動物園が來た時、正さんと見物に行つたら、正さんは猪を見て、獅子と

同種類だと教わて呉れたのを、今日までほんとうに思ッてゐた。正さんが教わなかつたら、こんなことは無かつたのに」

と、私は斯つうぶやいた。

其日學校が引けるとすぐ、去ッて校門を出た。そうして、村の土橋の下に、じつと息をこらしてゐた。ひよいと、頭を出すと、正さんが向うから歸ッて來た。土橋の上へ、正さんが來た時、私は下から足をぐいと、引張ッたら、正さんは、水の中へ落ちた。私はしぶき、をかぶつた。そのまゝ去ッて歸つた。

「どうしたの。そんなに濡れて」

と、母は不思議そうに、私の顔を眺めた。

私は、良心にとがめられて泣きだした。

「どうしたの」

「けんか………」

「たれと」

「正さんと」

私はもう家に居られない程、恐ろしくなつた。

母は正さんの家へ、あやまりに行つた。

私はすぐ、田圃の方へ出た。それでも恐ろしい。向うの土手を巡查が通る時、自分の方へ來るやうで、草の影へじつとかくれた。

そうして、夕方歸ッて行つた時、母から非常にしかられて、正さんの前に、あやまらさせられた。

あゝ七年の昔！

南
の
國

京と云ふ古い昔の都から、南の端での、此の暖い國へ來た時、私は言ひしれぬ、なつかしさを感しました。水とし云へば、加茂川の清流と、そのかすかな、ささやきの外、なんにも知らなかつたのに始めて青い廣い海と言ふものを見てそうして、乳人の守唄をきくやうな、やわらかい波のさゝやきを聞いて、もう南の國から、離れたいとは思いません。春の朝、秋の夕に、見るもの、きくもの、一

として皆、古い昔の都を偲ばせぬものはありません。そうして人しれず涙を落さしてゐます。

常安の峯に櫻が咲いて、鹿兒島の人々の心が、うかれ出しますと京は祇園の町筋に、はなやかな篝火がゆれて、厚化粧の若い女が、春の夜の淡い月影に照らされながら往來するのを偲ばしめ、そうして、花見小路の、歌舞練場の、床かしい三味線の音と、なまめかしい足拍子と、やはらかい舞舞臺の空氣の中に蝶のやうに、ひらくと動く舞扇を思はしめます。

夏が来て、祇園の祭りには、町の良家の稚子を思いそうして、あの道筋の家々の、赤い毛氈と、金の屏風を思い出し、祭祭りの神官の、異な服装を、再び見たいと思ひます。けれども、やつぱり

私は、南の國が好う御座ります。

いつまでも、京と云ふ都を慕ひながらも乳人の歌の海の音と南洋の海を思はしめる、廣い青い海と、芳烈な潮の香をかいで、そうして靜かに眠り度う御座ります。

我も又島の乙女と知りそめて船やるともおぼほそめてき

木村房江

春

雨

三味線の、絲よりも細い春の雨。今朝から小止なく降りつゞいて
ゐる。

私は靈子格子に倚つて、通りを眺めた。

柳の芽は、床かしい緑にもわて、忠臣藏の着物着た、紺の燕は、
其の長い枝にたわむれてゐる。

舞師匠歸りの舞姫が、蛇の目の傘を、淀の川瀬の水車と、くるく

る廻しながら、小聲で何やら唄ひつゝ通つた。其時私はふと、なせ鹿兒島には、加茂川のやうに、清い水の流れがないだらうか、赤い塔はないのだらうか、と、しみじみ思つた。

(今日は)

と、清香が、あいさつして行つた。

加茂川の、清い流れで、産湯を使った、清香の美しい肌と、輪廓のはつきりした白い顔が欲しいと、いつもないてゐた雛蝶の事が思い出された。

けれど、雛蝶は美人であつた。

彼の女は京都で、産れなかつたのを、苦にしてゐたのだ。それも其筈、雛蝶のやかたは、皆、京都産れの人達計りだつた。

や郵便が来た。

「京の姉より」と、薄墨の走り書き、春の雨に濡れてついたのも佗しや。

どこかでだけだるい三味線の音がする。

こ
ほ
ろ
ぎ

久し振りに病院の門を出に常雄は、都會の夏の夜の空氣を、心ゆく丈け吸ふて、シベリアの穿屋を思はせる様な、病室に歸るのは、嫌やになつた。

宅に歸つて、用事をすます間にも、一日も早く、こうして家に居たいと思つた。彼は琴路が頼んだ、寫真帖や、繪葉書帖をまとめて、富呂敷に包んで、歸らうと玄關に出ると、宴會に出てゐた。春次

雛蝶や、清香等が歸ッて來た。

「常さん歸るの」

「まア、好いじやありませんか、久し振りですのに」

と、歸らうとする彼を、無理やりに奥へ連れ込んだ。常雄は明るい電燈の下に座ッて、三人の女を等分に見てゐた。

「もう、姐さんの病氣は、大分好いッてね」

「は、近い内に退院でしやうよ」

「そうまア嬉しい事ね、明日………雛蝶さん、明日宴會があッて。」

「いゝね」

「じや明日上りますから」

「いつでも來て下さいよ。寂しくッてね」

「寂しい方が好いわ。二人でたんど、お話をしてね」

「馬鹿なッ」と、彼は苦笑した。

「なんのまア馬鹿な事がありますかい。ね清香さん」

「そうね」。

と、四人は譯もなく笑ッた。彼はこんな多愛もない話をするのが、なんとなく楽しい氣がした。

「もう歸らう。遅くなるさいけないから」

「いゝじやありませんか。今御ち走するわ」

と、清香は立ッて。臺所で下女に何か言ひつけてゐた。やがて下女は壽司を持ッて來た。四人はそれを食べながら、二週間の間に起ッた。花柳界の、色々な出來事を話した。彼は、自分達がごんなに世

間から、遠ざかッてゐるかど云ふ事を、つくづく感じて、單調な病院生活を嫌に感じた。

「あゝ、長い間遊んだ。歸ります。明日きツと入らッしやいよ」と、常雄は立ち上ツた。

「もうお歸り？。早いけれどね。きツと明日來ますわ」
「待ッてゐますよ」

と、「云ひつゝ、玄關に出て、琴路が抱ねの車に乗ツた。

と、「良さん電話一寸お待」と、雛蝶が言ふので待ッてゐると、

「早くお歸りッてよ。好いのが出來たのかど、心配してゐなさるわ。すまない事をしたわね。無理道にひきとめて。好い様に姐さんに言ッて下さいよ……」

と、雛蝶の聲を後に、小雨する中を、ゴム輪の車の音もなく、心地よい迂りに夢心地になツた。

彼はふと、今朝あまりのつれなさに、古い日記を讀んだ時の事を思い出した。七月二十八日の處に、日奈久の大事件の出來事が書いてあツた。それは、常雄がいつもの様に、海岸から金波樓の前に迂廻して、詩を吟じながら、散歩して歸ッて來ると、澤山人が集ッてゐるのでひよいと見ると、同じ宿にゐる女に、酔漢が、何かしらんありちらしてゐるのであツた。女は種々あやまつてゐたが、酔漢は益々つけ上る許りで、あツた。彼は氣の毒に思ッて、人波を分けて、其酔漢を、地上に投げ下した。そうして、女を逃げさせた。女は幾度も禮を云ッて歸ッて行ツた。見物は、はやし立てて止まなかつた

それも其筈。幾人もゐるが見てゐる許りで、誰れも手出をする者は居なかつたからだ。投げられた酔漢は幾度も、起きやうとあせツたが、彼は強く押へてゐた。酔はさめたらう。

常雄は宿に歸ツた。其時の女は琴路であつた。彼の女は夜、彼を訪うて、色々とお禮を言ツた。それが原因となつて、楽しい日が幾日もつづく様になツた。それは唯、單純なる一事件に過ぎなかつたが、是が複雑なる戀にならうとは思つてゐなかつた。それはこうであつた。常雄の父母は、遠の昔死んで、彼は伯父の家へ居た。伯父の家と云ふのは。熊本でも大の金持であつて、且つ豪家ではあるが常雄が氣に滿つる程、學資も出して呉れなかつた。彼は不満も云はないでゐたが、日奈久に伯父が病氣養生に來てゐるのを、甲斐甲斐

しく看病したが、其甲斐もなくどうく死んでしまつた。

葬儀があつてからも、伯父の家へゐたが、伯母が強くあたるのでどうく家出をしてしまつた。そうして、鹿兒島へ琴路を尋ねて來た………。斯んな事を回想してゐると、車はバツタリ、病院の門に留ツた。

ガランとした大きな玄關に、琴路は迎ひに來てゐた。「遅かつたね何かしてゐたの」

と、一寸笑ツて「随分待ツたわ」と言ツた。

「用事をすまして、それから壽司を御ち走になつて來たの」と常雄は車夫を振り返ツて

「御苦勞だツたね」と言ひつゝ、二人は廊下傳に病室に歸ツた。淋

しい電燈の光の下に、読みさした本が伏せてあつた。

常雄は椅子に腰を下して、ハタ／＼と扇團を使いながら、

「明日、清香や皆が来るツて。」と、笑ふと、琴路はうれしそうに
そう嬉しわね。一遍ぐらい出て来ててもね」と、言つた。そうして白
い巾の掛つた、ベッドの上に横になつて、常雄の顔をヒツと見入ッ
た。

「寂しかつて？」と、常雄が笑いながら言ふた。

「ね、ほんとに寂しかつたの。寢臺の下で、こほろぎが、今にも死
にそうな、あわれッばい聲で鳴くんだもの。

「こほろぎが？」

「ね、それは／＼あわれッばい聲よ、」

と、琴路はヒツと目を閉じた。常雄も眼を閉じた。こほろぎは、悲
しそうな——あわれッばい聲でなき出した。

「ほんにね。併し陽氣に話しやう。今聞いたことがあるから……」
と、彼は又目を閉じた。

「何をきいてきたの。まア、着物をぬいで、横におなり。」

と、琴路が言つたが、彼は黙つて、眼を閉じたまゝ、又もなき出し
たこほろぎを聞いて、車の上で思い出した事を感じて、自分の身の
行末を、悲しくかんじた。

寂しき家より

なつかしきSよ。

秋の夕日が赫々と、新た造りの家の日被に輝いて、青い疊のしかれた、廣い座敷で、入相の鏡の音を聞いてゐるSよ。私は、おん身と瓦斯の灯が華やかに輝いて、書架の金文字が、尖く光つてゐる書店で、別れてから以來、何事もうとくとして暮してゐる。

今私は、机に椅ッて、書架の本を眺めながら、軒から落ちる雨滴と

山の手の淋しい通りに音高い下駄の音と、下町のなまめかしい三味線の音を、じつと聞き入ッてゐる。只今、おん身は、思い出を誦してゐるだらうとも思ッてみた。

そうしてSよ。

私は靜かに眼を閉じた。此の間、おん身と、書店で會ツた時の、いつもより美しかツた顔と、白い手と、赤い帯が、きれぎれに浮んだ。私はそれを打ら消そうと、幾度かあせツた。何も私は、おん身をきらツてそうしたのではない。おん身の全身を、幻に見たかツた。けれど、

それは不可能な事だツた。で、私は眼を開けた。すると急に四方

が明るくなつたやうに感じた。そして、書架の「魔の曲」の上に、鬚の長い青い蟲が止まつてゐるのが、目に入つた。

青い蟲は、さびしな衰れな聲でなき出した。

私はじつと、それを聞いた、が心の底に言ひしれぬ恐ろしさを感じた。夫れは私の心の一片一片を、あの青い蟲が、死の方へ運んでゆく何物かに、元氣をつけるべく、嘸し立ててゐるのではないかとこう思つて、ぶるぶる震れた。きツと私の顔は、眞青く、唇は紫色になつてゐたにちがいない。

Sよ。

私はもうこんな弱い男になつてしまツた。おん身は樂觀的な人だから、笑うだらうか知らないが、私は日毎夜毎死の方へ近づいてゆ

くのを知つてゐる。私は早く死が来れば好いと思つてゐる。決して笑事ではない。事實なんだ。

私はせめて、戦國時代に生れたかつた。

今の此の世の、美しい罪惡が、公然と行はれるのを、見たりきいたりするのは、いやな事だ。あゝなせ私は戦國時代に生れなかつたのだらう。昨日も冷めたい月が輝いてゐる中で、妙圓寺参りの武者達を見て、少なからず胸を躍らした。あの美しい鎧をつけて、ギリシヤの傳記に見るやうな、白い馬に乗つて、戦場を馳せ廻つて見たのだ。

そんな事は、どうてい、今の世では出来ない。野蠻國へ行かなくては、

Sよ。おん身は、以上自分の書いた事を、讀んできたなら、きつと、事實でないと思つたらう。きつとそうだ。樂觀的なおん身には今の私の心持は分らない。學校では、私の事を精神病者と、云つてゐるんだもの何も私は精神病者ぢやない。私の心はしつかりしてゐる。なせ友人達が、そう言ふのか、不思議でならない。

私と趣味を同じくするSよ。

おん身は「午後三時」と、「五人女」を讀んだ事を思ふ。今に御覽河内屋與兵衛や、ドンファンラノリオみた様に、「放浪」とか、「享樂」とか云ふ、美しい文字にあこがれる、少年や、少女が出来るよ。

又、お七や吉三郎のやうに、貴い聖のお弟子でありながら、戀になやみ、其上自分の家に火を放つ、少年や少女が出来るに、ちがひ